

「レイテ決戦と小磯国昭内閣」メモ

●昭和19年7月22日、小磯国昭内閣成立

▽絶対国防圏の要衝 サイパン島陥落

東条英機内閣は 2年9か月で総辞職

正木ひろしは日記(19.7.22)に

「新内閣の出現は、神が日本を見捨てなかった証拠である。夜が白み始めた。説教〇〇が去った朝の、すがすがしい空気を感じる」

〈説教強盗〉大正15年から東京都下で強盗58件、家人を縛り上げては人生、防犯の説教をした妻木松吉のこと。昭和4年に逮捕され無期懲役の判決を受けたが、23年假釈放。平成元年に87歳で亡くなるまで防犯講演をして回った。

細川護貞さんも日記(19.7.18)に

「嗚呼、遂に東条内閣は倒れたり。日本国民の中に宿れる聡明は、遂に我国はじまって以来の愚劣なる内閣を倒したり。官庁の空気は明るくなり、知れる者は皆、慶び合いたり」

▽重臣の世論 岡田啓介元首相が「一日も早く戦争終結の道を考えなければダメだ」と 近衛文麿 平沼騏一郎 若槻礼次郎らを 倒閣に結束

徳川夢声は「夢声戦争日記」に

「東条内閣が総辞職したこと、私には感情的に会心のことでまことに目出たい。しかし、あとが小磯内閣とはなんだか気がぬけた」

▽小磯内閣の8か月半は「木炭自動車内閣」

終戦には まだ 1年余りも かかってしまう

●なぜ東条内閣の後に「終戦内閣」が出来なかったのか

▽当時の日本の国力 戦力は 絶望的な状態

「既に破弾界に達している」(参謀本部戦争指導班)

19年の生産見込み

飛行機 約3万機(計画は5万2千機)

鋼材 250~300万ト(〃450万ト)

アルミ 15万ト(〃19万ト強)

燃料輸送150万キロ(〃300万キロ)

小磯 国昭(こいそ・くにあき)

明治13(1880)~昭和25(1950)宇都宮生



まれ。陸軍大将。昭和7年陸軍次官、関東軍参謀長、朝鮮軍司令官を経て13年予備役編入。14年拓務相、17年朝鮮総督。19年7月に内閣を組織し、20年4月沖繩戦の最中に総辞職。A級戦犯として終身禁固刑。服役中に病死。著に「葛山鴻爪」

東条 英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)~昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。陸軍次官を経て昭和15年陸相。16年10月陸相兼任のまま首相。19年2月参謀総長も兼任。サイパン陥落で7月総辞職。戦後ピストル自殺を図り未遂。A級戦犯として刑死

正木 ひろし(まさき・ひろし)

明治29(1896)~昭和50(1975)東京生まれ。弁護士。本名は昊。三鷹事件、八海事件、白鳥事件などを弁護。丸正事件で真犯人を名指しして名誉毀損で有罪

近衛 文麿(このゑ・ふみまろ)

明治24(1891)~昭和20(1945)東京生まれ。昭和12年6月首相となり支那事変の早期収拾に失敗。15年再び首相、日独伊三国同盟締結。16年7月、第3次内閣を組織するが日米交渉妥結の展望を失い10月総辞職。戦後、戦犯に指名され自殺

細川 護貞(ほそかわ・もりさだ)

明治45(1912)~ 熊本県生出身。細川護熙元首相の父。昭和15年第2次近衛内閣首相秘書官。18年から近衛-高松宮の情報連絡役。著に「情報天皇に達せず」

▽この見込みが 達成されたとしても

「航空揮発油、普通揮発油、共に十二月迄なり。消費規制その他の措置に依り、三月まで維持出来るに過ぎず」(機密戦争日誌19. 8. 3)

▽兵器生産も逼迫し いくら 兵隊を召集しても 武器を持たない部隊の出現も

●東条内閣時代の「秘密主義」

▽藤原銀次郎軍需相は 8月2日の閣議で

船舶 石炭の状況が 極めて悪いことを説明 外相に留任した 重光葵が「こうした状態を、なぜ早く、我々に伝えなかったのか」

▽島田俊雄農商相は 食糧事情の窮迫を訴え

「長く細く行くか、太く短く行くか、何れかなり」 配給を3合にして 3か月間配給する案

●日本が頼みにしていたドイツも敗退が続く

▽7月20日には ヒットラー総統暗殺未遂事件 種村佐孝大佐(幹輔隊長)は「ドイツを見放す」

大本営機密日誌(19. 7. 21)

ドイツ内部の士気崩壊を現わすものであり、この事件を契機にわれわれとしては、いよいよドイツ頼れずとの判断であった。一年前にはムッソリーニ政権崩壊、イタリヤは降伏し、いままたドイツは虫の息となりつつある。三国枢軸はここにくずれんとし、日本は独力で戦争遂行を覚悟せねばならぬ段階になった。

▽三笠宮少佐は 書類の裏に 鉛筆で走り書き

「帝国は速やかに大東亜戦争を終熄せしむ」 種村に「この方針では如何ですか？」

●終戦への努力の第一歩「戦争を始めた政権を倒す」

▽重臣の考えは 東条内閣総辞職で達成されたが…

▽外務省報告書「日本外交の過誤」は

「実際問題として、二十年三月頃までは終戦工作を行い得るような国内状況ではなかった」

▽第一に「無条件降伏」へのアレルギーが強かった

▽ルーズベルトは カサブランカ会議(18年1月)で

「日独伊三国に無条件降伏の要求」を発表

岡田 啓介(おかだ・けいすけ)

慶応4(1868)～昭和27(1952) 福井県生まれ。海軍大将。連合艦隊司令長官、海相を経て昭和9年7月首相。二・二六事件で襲撃されたが、九死に一生を得る。戦争中は東条内閣倒閣、和平推進に重臣の中心となって動く

平沼 騏一郎(ひらぬま・きいちろう)

慶応3(1867)～昭和27(1952) 岡山県生まれ。検事総長、枢密院議長を経て昭和14年首相。A級戦犯で終身禁固刑

若槻 礼次郎(わかき・れいじろう)

慶応2(1866)～昭和24(1949) 島根県生まれ。大正15年首相、金融恐慌で総辞職し、昭和6年再度首相となるが満州事変で8か月で総辞職。著に「古風庵回顧録」

藤原 銀次郎(ふじはら・ぎんじろう)

明治2(1869)～昭和35(1960) 長野県生まれ。王子製紙社長を経て、昭和15年米内内閣商工相、18年東条内閣国務相、19年小磯内閣軍需相。この間、14年に私財を投じ藤原工業大(現慶大工学部)設立

重光 葵(しげみつ・あきら)

明治20(1887)～昭和32(1957) 大分県生まれ。駐ソ・駐英大使を経て昭和18年東条内閣外相、19年小磯内閣外相に留任。戦後東久邇内閣外相として降伏文書に調印。A級戦犯で禁固7年。27年、改進黨総裁。鳩山内閣副総理・外相として日ソ国交回復、日本の国連加盟を実現した

島田 俊雄(しま・としお)

明治10(1877)～昭和22(1947) 島根県生まれ。政友会幹事長を経て広田内閣、米内内閣農相、小磯内閣農商相

▽米英ソ三首脳のテヘラン会談(18年11月)でも確認
 联合国側の 絶対的条件と見なされた

▽第二に 二・二六事件(昭和11年)の亡霊

受け入れれば また 血を見ることにならないか

▽厳しい 憲兵の監視の目 木戸幸一(内相)の心配も
 終戦を考えている人が 一網打尽になれば

永久に 終戦の機会を 断つことにならないか

▽最近 重光家で発見された資料

「最高戦争指導会議記録・手記」が 裏付け

中央公論(昭和16年8月号)で「昭和天皇、終戦への道」

ドイツが敗けたら戦争終結

26/9 Pm4-5 内府談

陛下ヨリ 独逸屈伏等ノ機会ニ名誉ヲ維持シ
 武装解除又ハ戦争責任問題ナクシテ平和出来
 ザルヤ、領土ハ如何デモヨシ

内府ヨリ 右ハ何人ニモ談サレズ若シ洩レレ
 バ大事ナリ、自分ヨリヨク外相丈ニ伝フベシ

▽たとえ 天皇であっても

和平を考えたら 軍部が どんな行動に出るか

▽第三に「軍部大臣現役武官制」

終戦内閣に 大臣を出してくるか どうか

▽木戸や重臣たちが 抱いていた難問

後継内閣は とりあえずは 戦争継続内閣に

●後継首相を選ぶ重臣会議は18日午後4時から

▽木戸 首相経験者7人 枢密院議長原嘉道が出席

三番手の小磯に

戦時内閣だから軍人でなければならない、内外に大軍を動かしている陸軍から選ぶほかはないが、「東条陸軍」を抑えられる人物、東条(士郎)より先輩を選ぼうとなった。

現役大将だけでも22人。前任順に南方軍総司令官寺内寿一元帥(11期)、支那派遣軍総司令官畑俊六元帥(12期)、小磯(12期)の3候補が決まった。前線で指揮をとっている寺内、畑を呼び戻すには、作戦に支障がないかどうか、参謀総長の意見を聞く必要があった。

東条は総長を梅津美治郎大将と交代、親補式出席に参内していたが、総長権限を使い第1候

「日本外交の過誤」

吉田茂首相は昭和26年1月、サンフランシスコ講和条約締結を目前に控え、外務省政務課長に指示した。

「日本外交は満州事変、支那事変、第二次世界大戦というように幾多の失敗を重ねてきたが、今こそこのような失敗の掘ってきたところを調べ、後世の参考に供すべきものと思う。君たち若い課長の間で研究を行い、その結果を報告してもらいたい」

4月10日、50ページほどの報告書に纏められ、平成15年4月公開された。

木戸 幸一(きど・こういち)

明治22(1889)～昭和52(1977)東京生まれ。維新の三傑・木戸孝允の孫。文相、内相を経て昭和15年内大臣。開戦前、東条を首相に奏請したが、戦争末期は倒閣、和平工作に尽力。A級戦犯で終身禁固刑となったが病気で仮釈放。「木戸幸一日記」は東京裁判資料に

原 嘉道(はら・よしみち)

慶応3(1867)～昭和19(1944)長野県生まれ。弁護士を経て昭和2年田中内閣法相。6年に枢密顧問官となり枢密院副議長、議長を歴任。中央大総長も務める

寺内 寿一(てらうち・ひさち)

明治12(1879)～昭和21(1946)東京生まれ。陸軍大将・元帥。長州閥寺内正毅元帥の長男。昭和11年陸相、16年南方軍総司令官。敗戦後シンガポールで病死

畑 俊六(はた・しゅんろく)

明治12(1879)～昭和37(1962)東京生まれ。陸軍大将・元帥。昭和14年陸相、支那派遣軍総司令官を経て第2総軍司令官。A級戦犯で終身禁固刑、29年仮釈放

補の寺内を潰した。「第一線司令官を一日でも空けるのは不可能」が理由だが、自分を倒した長州閥、木戸と、國務相の辞表提出を拒否した岸信介に連なる寺内を総理にするわけにはいかない。東条の執念だったと云う。この条件は畑にも該当し 東条の了解を必要としない、予備役で朝鮮総督の小磯となった。

●小磯・米内光政連立内閣に

▽原は「元勳内閣の故知にならえ」と主張していた「此の内閣により国の運命が決まると云ふ時なり。軍人の一人に全責任を負へと云ふは無理なり。真に威望ある人の挙国一致内閣たるを要す。就ては、五人位協同して御引受することにしては如何。『卿等協力して内閣を組織せよ』との仰せあるが可ならん」

▽近衛も 小磯の政治力に不安

「米内の海軍での信望は圧倒的だから、この二人の連立内閣にしたらどうか」翌日 米内を説得

▽米内は心中 現役に復帰し 海相になることで海軍部内を抑え 終戦をもっていくことを決意

▽近衛は 他の重臣にも根回しし 木戸に提案 木戸も賛成 20日 二人に異例の大命降下

勅語

卿等協力して内閣を組織すべし。特に大東亜戦争の目的完遂に努むべし。尚ソヴィエツトロシアを刺激せざるやう着意するを要す

●「和平への可能性を探りたい」—重臣たちの暗黙の期待がこめられた内閣だったが…

▽「小磯は有頂天になっただけだった」と 岡田

▽「卿等協力して」が 自分に介添え役 支え棒 小磯は 総理の職責に関する事について 米内に 一切 相談しようとは しなかった

▽米内も 終戦へのイニシアティブは 総理・外相の職責 干渉がましいことは 慎むという態度

▽「陸海軍連立」の組合せは 協力の狙いとは裏腹に 意思統一もないまま スタートすることに

梅津 美治郎(うめづ・よしじろう)

明治15(1882)～昭和24(1949)大分県生まれ。陸軍大将。陸軍次官を経て昭和17年関東軍司令官、19年参謀総長。A級戦犯で終身禁固刑。拘置中に病死

岸 信介(きし・のぶすけ)

明治29(1896)～昭和62(1987)山口県生まれ。昭和16年東条内閣商工相。國務相の辞表提出を拒否し東条内閣を総辞職に追い込む。自民党幹事長、外相を経て32年首相。35年の安保闘争で退陣

元勳内閣

明治25年8月、第1次松方正義内閣が選挙干渉を糾弾されて総辞職に追い込まれた時、伊藤博文は第2次内閣を元勳総出で組織、危機突破を図った。大臣10人中、維新以来の功臣6人が含まれ、世に「元勳内閣」と称された。

米内 光政(まいない・みつまさ)

明治13(1880)～昭和23(1948)岩手県生まれ。海軍大将。連合艦隊長官、海相を経て昭和15年1月首相。日独伊三国同盟に反対、陸軍の協力が得られず7月総辞職。19年7月に現役に復帰、小磯、鈴木内閣海相となり、戦争終結に尽力した



木戸の小磯評

「小磯には何にもしっかりした判断はなかった。あの人は若い時、満州や蒙古の方でいろんな謀略をやるのに魅力を感じる風のタイプの男でね。こちょこちょした謀略的な…陸軍の軍務局にはそういうのがちょいちょいいたね。謀略で何かやってやろうというのがね。それはちょっと成功しても結局だめなんだね」

●「最後の一戦に勝利して…」

▽小磯は「葛山鴻爪」に書いている

「最後の一戦に勝利を獲られる望がないとも断言は出来ぬ。仮令、撃滅は出来ずとも、一時的撃破位は可能かも知れぬ。そこで和戦を決しても晩くはあるまい」

▽敵に大打撃を与え 華々しい戦果を背景に

「名誉ある終戦」「対等の交渉による終戦」

▽もう そのような可能性が

なくなっていることを 小磯は 見通せなかった

●東条は陸相に留任し、引き続き陸軍を握ろうとした

▽新陸相選考の三長官会議は 21日開かれた

杉山元教育総監は「便所のドア」

梅津参謀総長の意向 如何にかかっていた

▽東条は 前夜 富永恭次次官を 梅津の所にやり

「陸軍部内の動揺を抑えるため、陸相は依然東条大将に留任願うのが適当と思う」と 事前工作

▽梅津も朝 杉山と 留任阻止を打ち合わせ

▽富永が「東条留任でどうか」と 口火を切ると

梅津は「人心一新を求めてやまぬ国内の動向から見る時、東条大将は勇退してもらうのが適当と思う。陸相には杉山元帥になって頂くよりほかはない」と 宣告した

▽東条は 予備役を願い出て 翌日発令

●陸軍の小磯に対する態度は冷たいものだった

▽小磯は「現役復帰、陸相兼任は申し出なかった」

「熟慮が足りなかった」と 後悔しているが

「大本営機密日誌」によると「梅津に断られた」

▽小磯は 陸相に 山下奉文か阿南惟幾を希望

三つの条件を出した

①大本営令を改正し 総理を構成員にする

②それがダメなら 今回の戦争に限って 総理を構成員にする

③それも認められないなら 総理が戦争指導に 強力に関与し得るような 臨時機構を作れ

▽陸軍の回答は 21日午後 富永次官が持ってきた

①新内閣が戦争を継続するならば 協力を惜しまない

小磯の戦局認識

原枢密院議長が小磯に「向後どうしてやって行くのかね」と尋ねると「ともかく組閣出来たら死力を尽くしてやるだけですな」「死ぬばかりじゃ役に立たないね。時局は面倒なんだから余程しっかりやって貰わねばならないね」と暗示をかけたが、小磯にはそれが「終戦を急げ」という意味だとはわからない。「朝鮮にいて、大して負けているとは知らなかった。サイパンが陥落して、どうもおかしい、負けているなどは思ったが…」

葛山鴻爪(かざんこうそう)

小磯の回顧録。無期禁固の判決を受けた小磯は昭和25年11月3日、巣鴨拘置所で食道ガンのため病死したが、東京裁判の判事ただ1人、日本戦犯の無罪を唱えたインドのパール判事の、その無罪意見書の裏に、鉛筆で克明に綴ったもの。

杉山 元(すぎやま・はじめ)

明治13(1880)～昭和20(1945)福岡県生まれ。陸軍大将・元帥。陸相、参謀総長を経て昭和19年教育総監、陸相に再任。20年第1総軍司令官。敗戦翌日に拳銃自決

細川日記(19.7.24)

「陸相留任を拒絶さるゝや、自ら予備役を願ひ出たりと。その理由として推測せらるゝものは、一つはヤケツパチ、二は現地へ派遣せらるゝを恐れてなりと」。

東条を批判したため、一兵卒として召集されたり「死の戦地」に飛ばされたりした者は72人を数えたと云う。

②海軍がどうであろうと 陸軍は 小磯の現役復帰・陸相兼任に不同意 陸相には杉山元帥推薦

③首相やその他閣僚を 大本営に加えることには不同意 政治と統帥の調和は 現在の大本営政府連絡会議(12年11月)で 十分出来る

▽これでは「協力」を謳いながら 全て拒否
わずかに 連絡会議について「善処する用意」

● 8月5日「最高戦争指導会議」を設置

▽支那事変以来の戦争指導機関・連絡会議と
構成員 運営方法も変わらず 名称を変えただけ
▽正確な戦況は ほとんど 伝えられなかった

● 陸軍部内は何かと「東条後遺症」を引きずっていた

陸軍独裁の野望

「今後ノ国政運営ニ対スル陸軍トシテノ対策」と云う7月22日付の起草者不明の文書が残っている。「内閣ノ性格ヲ戦争完遂ノ一点ニ帰一セシメルコト」を目標に「陸軍ガ大キク現内閣ヲ指導スルノ心構ヲ要ス」。

さらに「早期政変アル場合ヲ予想」し、各方面への政治工作を行なう。具体的には、内閣に現役軍人を参事官として入れて政治幕僚とし、内閣の監視・指導・連絡に当たらせる。

重臣に対しては憲兵による監視は抑制し、その和平活動だけを監視する。一般国政については速やかに臨時議会を開いて国民の戦意昂揚を図り、機会を狙って戒厳令を断行する。

細川日記(19.8.7)

「東条首相に対しては「生かして置けぬ」との意味の投書しきりに来る由。軍はやはり次第に東条色薄らぎつつあるも、国内和平派に対し、是等癌的存在を一掃するとの申し入れを、警視庁に対し為し来たりと」

● 8月4日「国民総武装」のスローガンを閣議決定

▽武装しようにも あるのは 竹槍ぐらい
本格的な竹槍訓練 鉄不足で竹製ヘルメットも

山下 奉文(やました・ともゆき)

明治18(1885)～昭和21(1946)高知県生まれ。陸軍大将。昭和16年第25軍司令官となりシンガポール攻略。19年9月比島第14方面軍司令官。戦後、マニラで刑死

阿南 惟幾(あなみ・これか)

明治20(1887)～昭和20(1945)東京生まれ。陸軍大将。第2方面軍司令官、航空総監を経て昭和20年4月鈴木内閣陸相。終戦の夜、抗戦派を慰撫し割腹自決した

…… 小磯内閣に対する反感あらわに ……

佐藤賢了軍務局長は7月29日の翼賛壮年団全国支部長会議で、「今度の政変は全く一部の者の謀略に基づいたものである。どうか諸君も今後、依然東条内閣当時と同じ気持ちで地方において翼賛の運動に精進して頂きたい。一体、今度の内閣は二か月を出ずして倒壊するものと思っている」。

佐藤 賢了(さとう・けんりょう)

明治28(1895)～昭和50(1975)石川県生まれ。陸軍中将。昭和17年軍務局長となり、19年12月支那派遣軍参謀副長。A級戦犯で終身禁固刑となるが31年出所

…… 東条の威光にも衰え ……

8月を過ぎると、東条の腹心たちも、長くは中央に留まれなかった。

8月末に富永、12月には佐藤が転出、弾圧の先頭に立ってきた東京憲兵隊長四方諒二大佐も11月、上海憲兵隊長に格下げされた。首相秘書官赤松貞雄大佐は陸軍省軍務課長に横滑りして20年2月まで残ったが、小磯から「ほほう、あそこにまだ東条の残党が残っているな」とからかわれ、憤慨したと云っている。

●米内の終戦への決意は、次官に井上成美起用から

▽7月28日夜 京都・都ホテルに 井上を呼び出し
「君の政治嫌いは百も承知しているが、他に人が
いないんだ。政治の話になったら天井を向いて
いればいいよ」と 承知させた

▽次官ともなれば

政治と関連しない問題は 何一つない

▽朝 軍令部作戦室で 戦況報告を聞き

作戦電報の綴込みを見 国内事情を知るにつけ
「もはや 勝算は全くない 一日戦を続ければ
それだけ 人命 資材 国富を失うばかりでなく
和平の条件も ますます 悪くなる」

▽井上は 米内の許可をとると 8月29日

高木惣吉教育局長に 和平工作の研究を命じた

▽「このことは、大臣と総長(嶋田繁太郎から川詰敏次代)、私の
他は誰も知っていない。部内に洩れてはまずいから君は病気休養という名目を出仕になって貰う」

「最後は陛下の決断」

高木は療養と称し、藤山愛一郎の熱海の別荘
で構想を練った。名論卓説の時期は過ぎ、何よ
りも行動を迫られている。陸軍は「本土決戦、
あくまで戦争完遂」を叫び、海軍にも徹底抗戦
論者が多く、国内どこにも、戦争打切りの基盤
は出来ていない。連合軍も勝ち戦で、日本に都
合のいい条件で講和を承知するはずもない。

高木は日米開戦に反対した山本が、開戦前に
嶋田繁太郎海相に宛てた手紙、「畏れ多き事な
がら、ただ残されたるは、尊き聖断の一途のみ
と恐懼する次第に御座候」を、思い出したと云
う。幸い海軍は、待望の米内・井上コンビ。各方
面の流れを海軍に集め、最後は陛下に決断し
てもらおう以外に、陸軍を抑える切札はない。

▽重臣や 頼りになり 秘密を守れる人の歴訪から

▽並行して 日本に課せられる要求

賠償問題 天皇制を 連合軍がどう考えているか
世論の動向調査もした

▽高木は「終戦工作で 最大の難事は

革命の危険を 冒さないで

陸軍を説得することだった」と 云っている

古川ロッパ日記(19.9.4)

ならんでる ならんでる
黙々として ならんでる
雑炊食堂の前に
男・女・こども ならんでる
あり得ない！
この行列の中に 一人でも
きげんのいい人間がいるということは
戦争はここまで来た
ならんでる ならんでる

井上 成美(いのうえ・せいし)

明治22(1889)～昭和50(1975)仙台市生
まれ。海軍大将。昭和12年軍務局長とな
り、米内海相、山本五十六次官と共に日
独伊三国同盟に反対。17年海兵校長、英
語教育の継続を貫く。19年8月海軍次官
に就任し、終戦工作に当たる

山本 五十六(やまもと・いそく)

明治17(1884)～昭和18(1943)新潟県生
まれ。海軍大将。海軍次官を経て昭和14
年8月連合艦隊司令長官。ハワイ真珠湾
攻撃を立案、実行。陸上攻撃機でソロモ
ン諸島の前線基地を視察中、待ち伏せ
の米軍機に撃墜され戦死。死後元帥

高木 惣吉(たかぎ・そうきち)

明治26(1893)～昭和54(1979)熊本県生
まれ。海軍中将。昭和19年3月教育局長。
9月から「軍令部出仕兼海大研究部員」
の肩書きで、終戦工作の研究に当たる

嶋田 繁太郎(しまだ・しげたろう)

明治16(1883)～昭和51(1976)東京生ま
れ。海軍大将。昭和16年東条内閣海相。
部内の信望なく、19年2月軍令部総長を
兼務、東条内閣倒閣運動に火をつける。
A級戦犯で終身禁固刑。30年に釈放

▽重光外相も 高木と同じ「最後は鶴の一声」

▽私たちが 戦後の今 思うのは

沖縄が戦場になる前 せめて 原爆投下の前
ソ連が参戦する前に 終戦出来なかったか

▽混乱なく 終戦に持って行くには

あるいは 止むを得ない 中間内閣だったのか

●米軍来攻に大本営が立てた迎撃計画は「捷号作戦」

▽作戦名に勝利の願い 7月24日裁可

..... 捷号作戦計画

「敵ノ決戦方面来攻ニ方リテハ空海陸ノ戦力
ヲ極度ニ集中シ敵空母及輸送船ヲ所在ニ求メ
テ之ヲ必殺スルト共ニ敵上陸セハ之ヲ地上ニ
必滅ス」。また作戦区域、予期決戦正面を

捷一号 比島方面

捷二号 九州南部、南西諸島及台湾方面

捷三号 本州、四国、九州方面

捷四号 北海道方面

▽「戦力を極度に集中」としながら 実際は

本土防衛をにらんで「七割決戦案」

▽サイパンを失い マリアナ沖海戦で空母3隻喪失

基地航空部隊は 壊滅的な打撃を受けていた

▽効果的な 本土防衛態勢を築くには

敵に打撃を与え 時間を稼ぐ必要があった

●最高会議は8月19日、「戦争指導の大綱」決定

「今後採るべき戦争指導の大綱」

一、帝国は、現有戦力及び本年未頃迄に戦力化
し得る国力を徹底的に結集して敵を撃破し、
以て其の継戦企図を破潰す

二、帝国は、前項企図の成否及び国際情勢の如
何に拘らず、一億鉄石の団結の下に必勝を確
信し、皇土を護持して飽く迄戦争の完遂を期
す

三、帝国は、徹底せる対外施策に依りて世界戦
政局の好転を期す

▽小磯は 統帥部の 第一の戦場判断が

「比島」であることを 引き出した

藤山 愛一郎(ふじやま・あいちろう)

明治28(1897)～昭和60(1985)東京生まれ。昭和16年日商会頭。32年岸内閣外相となり、日中国交回復に尽力した

終戦について重光

重光は、外務省が「日本外交の過誤」を纏めた際、昭和26年4月の事情聴取で、終戦工作の難しさについて「当時は軍部を納得させ得るということが非常に大きかった」と語っている。

「大臣に就任して自分がやるべきことと考えたのは、対支新政策の推進と終戦であった。ところが、終戦については、四六時中憲兵の監視を受けているし、又外務省内にもスパイみたいなものを抱え込んでいた状況だったから、事を進めるのに実に苦心した。自分が本当に腹を打ち明けることが出来たのは、内大臣と陛下だけである。結局木戸内大臣と、宮中は内大臣、外は自分が受け持って事を進めて行くことに相談し、最後は鶴の一声で行くより外はないと肚を決めていた。その時期はドイツ崩壊ということにしていた」。

小磯は統帥部の壁の厚さを憤慨

小磯は最高会議で、どこで決戦をやるのか知りたいと思い作戦用兵事項に再三、口を出した。ところが統帥部はこれを嫌い、秦彦三郎参謀次長が「近代的作戦用兵を知らぬ首相が、作戦用兵に容喙するのは遠慮して頂きたい」と言い出す始末。小磯は回顧録に「不正規支那軍を相手に六、七年も原則はずれの作戦を続け、軍隊の素質も恐らく日露戦争当時の面影すらあるかどうか疑わしい今日、近代的作戦用兵などと呼ぶのを聞いて、むしろおかしくもあったのである」。

▽小磯にとっては「比島決戦」こそチャンス

「決戦が幸い勝利しても、休戦和平に入る準備態勢が整っておらねば、九仞の功を一簣に欠くようなことにならぬとも限らぬ」

●対ソ、対重慶外交攻勢を強めていくことに

外交方針(19. 8. 19最高戦争指導会議決定)

世界各国の動向を注視しつつ作戦に呼応し左の対外施策により世界政局の変転に対処す

(イ)「ソ」に対しては中立関係を維持し更に国交の好転を図る。尚速かに独「ソ」間の和平実現に努む

(ロ)重慶に対しては速かに統制ある政治工作を発動し中国問題の解決を図る。之が為、極力「ソ」の利用に努む

(ハ)独に対しては緊密なる連絡の下に共同戦争完遂に邁進せしむる為、凡有手段を講ず。但し日「ソ」戦を惹起する事なし。万一、独が単独和平をなす場合に於ては、機を失せず「ソ」を利用して情勢の好転に努む

●「独ソ和平」斡旋の挫折

▽重光外相は 8月28日

スターマー独大使に 提案したが

ドイツは9月14日「意思なし」と拒否回答

▽ソ連には 元首相広田弘毅の派遣を決定したが

ソ連も18日「特使派遣」を拒否してきた

▽スターリンは11月7日 ソ連革命記念日に

日本を「侵略国」と非難演説

スターリンの演説

由来歴史の示すところによれば、侵略国は常に新しい戦争に対して準備を整えている。真珠湾事件や、香港、シンガポールに対する最初の攻撃の如き、事実は決して偶然と見なすべきではない。侵略国としての日本が、平和愛好国家の英米よりも、戦争に対して完全なる準備を整えていたことを示すものである。

▽汪兆銘が病死(11月10日) 重慶工作も頓挫

……「独ソ和平」の幻想 ……

重光外相は東条内閣時代から「独ソ和平」斡旋を提案していたが、それはもう客観的にとても無理な情勢だった。ヒットラーの最終目的は、初めからソ連壊滅であり、独裁者ヒットラーが生きている限りは変わるはずがなかった。

ソ連にしても独ソ戦当初、敗走を重ねている時だったら可能性があったかも知れないが、日米開戦の頃、ドイツ軍の進撃を食い止め、米英の援助の下に反撃に転じていた。強大な軍事力を誇る米英と手を結び、日本の敗戦は確実になっている。日本がいくら譲歩を示しても、何倍もの分け前が手に入るというのに、それを崩すようなことをするわけがない。

ソ連はすでにテヘラン会談で、ドイツ崩壊後の対日参戦を約束し、その代償として南樺太と千島列島領有を要求していた。ソ連が力を信奉し、冷酷に利益を追求する現実主義に徹した国なんだー日本外交にこの理解が足りなかった。この幻想が、敗戦時にソ連に調停を求める甘い期待につながってしまう。

広田 弘毅(ひろた・こうき)

明治11(1878)～昭和23(1948)福岡県生まれ。駐ソ大使、斎藤、岡田内閣外相を経て昭和11年二・二六事件直後に首相。A級戦犯として文官中ただ一人死刑に

汪兆銘(わう・ちやうめい)

1883～1944 字は精衛。国民党指導者となり国民政府行政院長。昭和13年重慶を脱出し、15年南京に国民政府を樹立、主席となる。名古屋で病死

- 大本営は「捷一号作戦」の比島防備強化を急いだ
▽中心は ルソン島

南方資源地帯と本土を結ぶ 日本の生命線
▽7月28日 第14軍を第14方面軍に昇格
その下に 第35軍を新設

ミンダナオ レイテの 比島中南部を担当
▽9月26日には 山下奉文を方面軍司令官に
「地上決戦はルソン地区にこれを求む」と指示

- 海軍は基地航空部隊「第1航空艦隊」の整備を急いだ
▽サイパン攻防戦で マリアナ諸島に展開の

1600機は 壊滅的な打撃
▽司令部をダバオに移し 9月初めには 500機に
▽9日から始まった空襲で またも 大きな痛手
被害を大きくした「敵来襲の誤報事件」

1 航艦の実働機数は 188機に減少
▽大本営は マニラ空襲(9月21日)で
決戦方面を「捷一号」の比島方面と決定
▽連合艦隊司令部も 9月28日
作戦指揮効率化のため 旗艦の軽巡大淀から
日吉台の 慶応大学構内に移転

- 米軍は重大な作戦変更をしていた

▽ダバオ空襲の際 レイテ島で撃墜され
原住民に助けられた 米機パイロットが
レイテの日本軍防備が 薄いことを聞き出した
▽第3艦隊司令長官 ハルゼーは
迎撃する日本機が 少なかったことから
「敵の準備は不足している 時間を与えずに
食い付くべきだ」と「ミンダナオ攻略を中止し
、レイテに直接 進むべきだ」と 打電

▽米統合参謀本部は 9月15日
年末に予定していた レイテ上陸作戦を
2か月繰り上げ「10月20日実施」と決定

- 沖縄、台湾空襲は10月10日から始まった

▽T攻撃部隊が出撃 台湾沖航空戦(12~16日)
▽12日夕方は 比島沖に台風
荒れ模様で 絶好の攻撃日和だった
次々と 威勢のいい報告が 入ってくる

最初は「ルソン地上決戦」

比島には島が2千もあって、少ない兵力を分散配置するよりルソン島に集中させた方が効率的。敵機動部隊を考えれば増援兵力の海上輸送も困難であり、大本営は7月末①ルソン島に敵が来襲した場合は空海陸の総合決戦を行なう②中南部比島の場合には、空海の決戦を行い、地上決戦は行なわない。この基本方針を決定し、山下赴任の際にも「陸上決戦場はルソン島に限定」の作戦計画を指示した。

…… ダバオ海軍見張所の誤報事件 ……

9月10日午前4時、見張員が「湾口に敵上陸用舟艇発見」続いて「敵水陸両用戦車が基地の方向に向かう」と報告してきた。1航艦は「総員陸戦用意」を命ずると共にミンダナオ基地の全戦闘機を一つ北のセブ島に退避させた。ところが敵は一兵も来ない。前日の空襲で神経を尖らせていた見張員が、水平線にきらめく波を敵舟艇と錯覚したのだった。

富士川の源平の戦い(1180年)で水鳥の羽音に驚いて逃げ出した平家と同じだが、小さなセブ基地に戦闘機100も集中する超過密現象が起きてしまい、米軍は波状攻撃を繰り返した。

T 攻撃部隊

全海軍から選抜の精鋭飛行隊と、海軍に編入された陸軍爆撃隊で編成された150機で、軍令部参謀源田實中佐考案の特殊攻撃部隊。開戦当初500時間だったパイロットの飛行時間は、多い者でも150時間。日本機にはもう米機動部隊の防空網を正面から突破する力はなかった。

そこで、比島沖に発生しやすい台風の力を借りて敵が戦闘機を飛ばせに

▽大本营は16日 軍艦マーチの鳴り物入りで

「轟撃沈 空母10隻 戦艦2隻

撃破 空母3隻 戦艦1隻」と発表

▽ラジオは 繰り返し この発表を読み上げ

新聞社の掲示板には速報 黒山の人ばかり

劇場や映画館でも ラジオ放送が流され

観客は総立ちで 万歳三唱に沸き立った

▽大本营は19日 さらに「撃沈破45隻」と発表

国民には 大勝利の祝い酒が 特別配給

▽20日には 日比谷公会堂で

「1億憤激米英撃砕国民大会」

▽小磯首相は 軍装も凛凛しく 塩辛声で演説した

「国民待望の的であった決戦の幕は、果然切って

落とされ、かくも見事な大戦果が獲得された。

勝利は必ずわが頭上にある」

▽国民はみんな この戦争が

もう 勝利で終わるかのように 喜んだ

●ところが、これは幻の大戦果だった

▽撃沈は1隻もなく 巡洋艦2隻を大破させただけ

▽ハルゼーは 日本の海外向け宣伝放送

「米機動部隊全滅」を嘲笑うように 打電した

▽「東京放送が全滅と報じた第三艦隊は、全艦海中よ

り引き揚げられ、敵に向かって退却しつつあり」

— 何でこんなことになったのか —

肝心のT攻撃部隊レーダーが故障で2割前後しか働かず、闇夜に鉄砲を撃つと同じになった。その上、パイロットはいくら精鋭でも戦場経験のない者ばかり。月のない闇の海を、雷撃のため思い切り高度を下げて突進する。爆発が起こると、幻惑され何も見えない。味方機の自爆炎上を敵艦轟沈、大砲発砲の炎を魚雷命中と誤認した。誤認報告に誤認が重なり、とてつもない誇大戦果に膨れ上がった。

●青天の霹靂、「敵機動部隊発見」

▽16日未明 索敵機レーダーが 3群を探知

午前10時過ぎ「台湾東方海上で

西に進む空母7隻、戦艦7隻発見」の報告

くい夜間、または薄暮に雷撃攻撃をかける。Typhoonの台風またはToepedoの魚雷から命名されたといわれ、切札は雷撃機につけたH6号レーダー。敵機動部隊を捉えた偵察機が電波で誘導、夜間レーダー攻撃する段取り。

源田 實(げんた・みゆき)

明治37(1904)～平成1(1989) 広島県生まれ。海軍大佐。真珠湾攻撃作戦計画に従事、「海軍航空の神様」と云われた。戦後航空自衛隊空将、航空幕僚長。昭和37年参議院議員(当選4回)

— 大本营発表(19日午後6時) —

我部隊は十月十二日以降、連日連夜、台湾及びブルソン東方海面の敵機動部隊を猛攻し、その過半の兵力を壊滅して、これを潰走せしめたり。

一、我方のおさめたる戦果総合、次の如し。

轟撃沈 航空母艦十一隻、戦艦二隻、巡洋艦三隻、巡洋艦もしくは駆逐艦一隻 撃破 航空母艦八隻、戦艦二隻、巡洋艦四隻、巡洋艦もしくは駆逐艦一隻、艦種不祥十三隻、その他火焰火柱を認めたるもの十二を下らず

撃墜百十二機(基地における撃墜を含まず)

二、我方の損害 飛行機未帰還三百十二機

本戦闘を台湾沖航空戦と呼称す。

— なぜ海軍は隠したのか —

背景に、タンカーと燃料不足があった。海軍は「捷号作戦」が決まった時、連合艦隊出撃に必要なとして高速油槽船6隻の使用を、陸軍に申し入れていた。燃料需給が逼迫している時で、陸海軍の話し合いでは「連合艦隊解散論」まで出ていた。

▽戦果報告を再検討の結果

「米空母は 確実に10隻は健在」の判断に

▽しかし 誇大戦果は 訂正されず

両総長は18日「台湾沖航空戦勝利」を上奏

19日には 戦果を拡大させ

「朕深く之を嘉賞す」と 天皇の勅語まで

●最大の問題は、陸軍に「訂正」を全く知らせなかった

▽参謀本部作戦部長 真田穰一郎少将は「戦後、

米軍編纂の太平洋戦史を読んで、初めて判った」

▽その結果は 重大だった

●米軍のレイテ作戦は、10月17日朝、レイテ湾口ス

ルアン島上陸から始まった

▽大本营は18日「捷一号作戦発動」を発令

▽20日朝 米軍7個師団20万がレイテ上陸

護衛空母18隻 戦艦6隻 701隻の大艦隊

●参謀本部は「ルソン決戦」の方針を、急速「レイテ地上

決戦」に変更してしまった

▽作戦課長 服部卓四郎大佐は

「敵艦隊に決定的な打撃を与えたものと信じ、その直後にレイテに進攻してくることは、従来にない、無理押しの作戦をしているものと判断した。レイテ海岸には機動部隊の援護なき上陸船団と上陸部隊が密集している。今こそレイテに陸海空の決戦を求めるべきだ」

▽山下方面軍司令官は「何か月もかけて準備したルソン決戦を棄てて、レイテに進出するなど、無謀だ。第一、海上輸送の準備もない」と 反対した

▽服部は マニラに飛んで 説得

「一刻を争う。機を失せず精鋭部隊投入を」

第1 第26師団の レイテ増援が決まった

●レイテの第16師団1万9千将兵は悲惨な戦闘に

▽数千発の砲弾 ロケット弾が炸裂

陣地は破壊され 電話線が寸断され

将兵の肉片 内臓が飛散した

▽島の東側に 配備の部隊は 銃や弾丸

食糧も全部棄て 山に逃げ込むのが やっと

「連合艦隊を解体して、使っているタンカーを全部、南方からの燃料輸送に当てたらどうか。今や、敵撃滅のために何の効用なき連合艦隊のために月七万トンの重油を無駄遣いさせるのは何とも勿体ない。よろしく、瀬戸内海に釘づけにすべきである」。

こんな激論の中で、やっと要求を認めさせた海軍としては、「あの大戦果は間違いでした」とは、とても云えなかったのだろう。

服部 卓四郎 (はっとり・たくしろう)

明治34(1901)～昭和35(1960)東京生まれ。陸軍大佐。ノモンハン事件の時の関東軍参謀。昭和16年作戦課長となり、開戦からガダルカナル敗戦までの陸軍の主要作戦を指導。責任を問われ、一旦陸相秘書官に転出したが18年10月作戦課長に再任。戦後は、厚生省資料整理部長などとして戦史資料整理に当たる

…… 結局はガ島の繰り返し ……

参謀本部は、第一決戦兵力である味方航空戦力の実情をどの程度把握していたのだろうか。

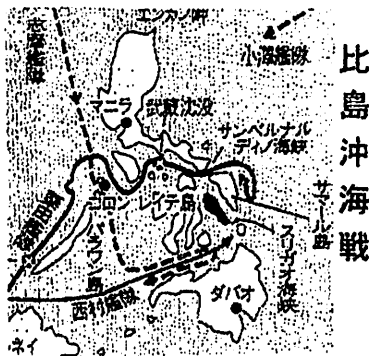
米軍がレイテに上陸してきた時、台湾沖航空戦と相次ぐ空襲で海軍機は比島にわずか35機、台湾、九州に230機。陸軍の第4航空軍も残存200機で、そのうちすぐ使える可動機は6、70機に過ぎなかったのだ。

制空権、制海権のない所に作戦が成り立たないことは、ガダルカナル、サイパンでいやというほど味わったはずだ。結局は的確な総合判断もせず、味方に有利な情報だけに頼ってしまう。服部は戦死、戦病死19200人、それもほとんどが餓死というガ島敗戦の時の作戦課長。今度はレイテが7万余りの英霊が眠る戦場となる。

▽暴風雨で 米軍上陸前から 通信網 道路は不通
第35軍 方面軍も 16師団の壊滅状態を
知らないまま レイテ決戦へ突入

- 10月23日から比島沖海戦(※別称はレイテ沖海戦)
- ▽航空総攻撃を24日 レイテ突入日は25日
- ▽まず 囿役の第1機動艦隊(小沢治三郎中将)が
20日 豊後水道から ルソン海峡に向かった
- ▽突入部隊主力の 第2艦隊(栗田健男中将)は
22日朝 ブルネイ泊地(秘材)を出撃
比島中央部の島々を縫い 一旦 太平洋へ出て
北から レイテへ

▽これに 呼応して
ブルネイを出た
西村祥治中将の別働隊
台湾を出た
志摩清英中将の
第5艦隊が 南から



▽レイテ湾挟み撃ちの計画

- まず栗田艦隊旗艦・重巡愛宕が沈没
- ▽23日 パラワン水道で 潜水艦攻撃を受け
愛宕 摩耶が沈没 高雄も大破
- ▽栗田は 艦隊司令部を 戦艦大和に移したが
「通信不備」の 致命的欠陥を 生むことに

……なぜ旗艦を大和にしなかったのか……

夜明け前にレイテ突入の計画だったから、日本海軍の「指揮官陣頭」の伝統からも、夜戦が得意で、足回りのきく重巡がよいと、連合艦隊の意向だったという。しかし沈没の際、司令部通信要員の多くが他の駆逐艦に収容されてしまい、大和の通信員で補充したものの、艦隊旗艦としての通信に慣れていない。これが、艦隊司令部の通信能力低下につながった。

広汎な海域で、同時に4つの艦隊が協同行動をする。作戦の成否は、完全なタイミングの一致にあったのに、お互い状況不明のまま、戦闘をすることになった。最初から通信設備、防御力に優れた大和を旗艦にすべきだった。

「史上最大の海戦」

海軍は、水上艦艇の全滅を賭してでも、米軍のレイテ進攻を食い止め、南方補給線を守り抜こうとした。

本来は海上決戦の主力となる第1機動艦隊は、すでに優秀なパイロットを数多く失っていて、航空攻撃に当たる飛行隊を満足に編成出来ない。そこで、これを囿の捨て駒にして、米機動部隊を北方に引き付け、その隙に3艦隊がレイテの上陸地点に突入、輸送船団と刺し違えようという作戦計画だった。

動員した艦艇は世界最強の大和、武蔵はじめ戦艦9隻、空母4隻など77隻。当時の連合艦隊の8割に相当し、航空兵力は本土防衛用に残してあった第2航空艦隊を比島に進出させ、716機。対するアメリカ側は上陸用艦船を含め900隻近く、航空機1280機。

この日米海軍の大艦隊が、10月23日から4昼夜にわたって、レイテを中心に東西600カイリ、南北200カイリ、日本本土の約1.4倍の広大な海域で、史上最大、最後の海戦を展開した。

小沢 治三郎(おさわ・じさぶろう)

明治19(1886)～昭和41(1966)宮崎県生まれ。海軍中将。海軍切つての実戦的戦術家といわれ、開戦時、南遣艦隊長官。第1機動艦隊長官を経て昭和20年5月、最後の連合艦隊司令長官となる

栗田 健男(くりた・けんお)

明治22(1889)～昭和52(1977)茨城県生まれ。海軍中将。水雷系の出身で開戦後は第7、第3戦隊司令官。昭和18年8月第2艦隊長官となり、捷1号作戦でレイテ湾突入を目指したが、途中で反転、所期の目的を達しなかった。20年1月海兵校長

●航空総攻撃が失敗、栗田艦隊に米機の集中攻撃

▽基地航空部隊は24日 250機が出撃

悪天候で 米機動部隊を攻撃出来たのは 11機

▽小型空母プリントンが 火災炎上

米側が 雷撃処分したのが 唯一の戦果

▽戦艦武蔵は 魚雷20本 爆弾17発を受け

24日午後6時35分 シブヤン海に水没

▽栗田艦隊は 退避行動で 6時間の遅れ

レイテ突入を 25日午前11時に変更

●栗田艦隊は、レイテ湾を目前にして反転した

▽サンベルナルディノ海峡から 太平洋へ出て

サマル島沿いに 南下していたが

25日午前6時45分 米空母部隊を発見

▽栗田は 戦艦・巡洋艦戦隊に 突撃を命じ

大和も 45発の砲撃を開始

護衛空母1隻 駆逐艦3隻を 撃沈したが

煙幕 スコールに邪魔され 追い切れない

▽敵機の攻撃で 損害も出始め 午前11時20分

追撃を打ち切り レイテへの進撃を再開

▽ブルネイを出た時 32隻だった艦隊は

半分の16隻に 減っていた

▽そこへ「敵機動部隊」の情報

栗田は 午後零時26分 反転を命令

連合艦隊司令部に 打電させた

「レイテ泊地突入を止め、サマル東岸を北上、

敵機動部隊を求めて決戦す」

▽しかし、栗田が決戦を求めた

敵機動部隊は 実際は 存在しなかった

▽栗田艦隊は28日 ブルネイに 帰ってきた

●四役の小沢艦隊は、「全滅覚悟で敵機動部隊を北方に誘い出す」という悲劇的な役割を果たしていた

▽わざと無電を発信 敵に位置を知らせた

▽ハルゼーは「これぞ日本の主力部隊」と見て

第34機動部隊 高速戦艦部隊を 急速北上

▽小沢艦隊は 瑞鶴など 空母4隻を失ったが

レイテ湾の海峡出口は 空っぽになっていた

▽レイテ湾では 輸送船団60隻が揚陸中

その1隻には マッカーサーが乗っていた

南からの突入も失敗した

西村艦隊は、予定通り未明突入のため25日午前1時半、スリガオ海峡にさしかかった。ところが、待ち伏せていた米艦隊のレーダー攻撃を受け駆逐艦1隻を残して壊滅した。乗員1400人前後の戦艦山城、扶桑で、生き残ったのは共にわずか10人だった。

後続の志摩艦隊も、炎上する西村艦隊を見て、一撃しただけで離脱した。

…… 米艦隊の慌てぶり ……

ハルゼーが、小沢艦隊攻撃に第34機動部隊を北上させたため、栗田艦隊接近に慌てたのが、第7艦隊長官キンケイド中将。レイテ湾の輸送船団援護に当たっていたが、護衛空母、旧式戦艦ではとても大和に太刀打ち出来ない、ハルゼーに応援要請をした。

しかしハルゼーの方は、手負いの栗田艦隊など第7艦隊で十分と無視。重なる緊急要請電にグアム島で指揮をとっていたニミッツは、午前10時「第34機動部隊はいずこにありや」と打電させた。しかも暗号係士官が「全世界は知らんと欲す」と、余計な一句をつけたものだから、ハルゼーは「こんな侮辱はない」と、帽子をデッキに叩きつけて怒ったという。

— 悔いを千載に残す —

作家・大岡昇平さんは「レイテ戦記」に、「栗田艦隊の反転は悔いを千載に残したというのが、われわれの感情的判断である」と書いている。

負けは負けでも、せめてこの時大和がレイテに突入していたらどうだったかと、戦後も長く「謎の反転」として話題になった。

●一番大きかったのは、栗田艦隊が海軍伝統の「艦隊決戦思想」に取り憑かれ、「輸送船団撃滅」の本来の作戦目的を軽視した結果でなかったのか

▽8月10日 マニラで「捷一号作戦」会議の時

小柳富次参謀長は 作戦計画に 不満を表明

「この計画は敵主力の撃滅を捨て、敵輸送船団を
作戦目的としている。我々はあくまで敵主力の
撃滅を第一目標にすべきものと考えている」

▽連合艦隊作戦参謀 神重徳大佐に

「一体、連合艦隊司令部は、この突入作戦で水上
部隊を潰してしまっても構わぬ決心か」

▽神は「フィリピンを取られてしまえば、南方は遮
断され、日本は干上がる。そうなっては、艦隊を
持っても宝の持ち腐れです。どうあっても、
フィリピンを手離すわけにいかない。この一戦
に連合艦隊をすり潰しても敢えて悔いがない。
これが長官の決心です」と 豊田副務長官の
強い決意であることを伝えた

▽しかし 小柳は「栗田艦隊はご命令通り輸送船団
目指して突進する」と云いながら 念を押した
「途中で敵主力部隊と対立し、二者どちらを択ぶ
か迷うような場合は、輸送船団を捨てて敵主力
の撃滅に専念するが、それで差し支えないか」

▽神は どうして「あくまで輸送船団撃滅だ」と
作戦目的を 徹底させなかったのか

「艦隊決戦」を望んでいた栗田艦隊

参謀の大谷藤之助中佐は「旧式戦艦や価値な
き輸送船と引き替えに、最後のとっておきの
精強な艦隊を潰すよりは、よしや全滅しても、
最強の敵機動部隊に体当たりして、砕けた方が
どれだけ有意義か知れない。これこそ死花を
咲かすというものだ。本望だ。これが当時の長
官以下幕僚の心境だった」と云っている。

●栗田艦隊が反転した時、「捷一号作戦」の海軍決戦は
事実上終止符を打った

▽比島沖海戦の 敗北が決まり

輸送船団を 撃滅出来なかったことで

「レイテ決戦」も 決戦の性格を 失っていく

なぜ栗田艦隊は反転したのか

栗田は戦後、GHQ歴史課に提出し
た陳述書(昭和24年12月10日)の中で、こう
書いている。

「私は既に予定時刻を遥かに遅れて
レイテ湾に突入する事は敵の対抗準備
なれる所に徒に好餌となり突進する
事となる虞あり、一方、レイテ湾の
状況は不明であり、南方から襲応す
べき第三部隊(西・藤田)は既に潰え
ている。更に敵航空機の波状攻撃は
既に始まって居るし敵機動部隊が北
方に在るのを感じている。斯かる状
況に於ては寧ろ予定を変更し北方の
敵機動部隊を攻撃するのを可と認め
た。それでレイテ湾突入を取止めて、
反転を決意した次第である」。

また小沢艦隊の情報について「その
片鱗すらも私の耳に入らなかった。
今でも明瞭に覚えている事は二十五
日夕部隊がサンベルナルディノ海峡
に入る前小沢部隊の戦況を報ずる電
報を見た。私はこのとき折角の小沢
部隊の奮戦であるけど今となっては
もう時期遅れだと思った。大和の戦
闘詳報によると十二時すぎと十四時
過ぎに小沢部隊の電報を受領してい
るが、私は部隊がレイテ突入を中止
した前後にこのような電報は聞いた
記憶がない」。「後から考えて見れば、
爾後(戦況)暴露した通信事務の不
円滑は茲に熟練な司令部通信員の不
足や艦隊旗艦としての通信に不慣れ
の通信員等に基づくものかも知れな
い」と、通信不備を認めている。

豊田 副務(とだ・そむ)

明治18(1885)～昭和32(1957)大分県生
まれ。海軍大将。昭和19年5月連合艦隊
司令長官となり、20年5月軍令部総長

●比島沖海戦最大の敗因は、航空戦力の圧倒的な差

- ▽こちらが 航空兵力の傘を かぶらずに
鉄の雨の中に 突っ込んでいった結果
- ▽それが 特攻隊による 体当たり攻撃を生むことに

…… 神風特別攻撃隊 ……

アメリカの辞書に「KAMIKAZE＝スーサイド・タクチック、自殺戦法」と紹介され、元寇の神風の連想から「かみかぜ」と云うことが多いが、第1航空艦隊長官大西滝治郎中将が命名したのは、「しんぷう特別攻撃隊」だった。

●大西は最初、特攻作戦に反対だった

- ▽空母千代田艦長 城英一郎大佐(比島沖海戦で戦死)が
マリアナ沖海戦に 大敗して
「もはや体当たり攻撃以外に、勝算はない」
- ▽この進言を「そんなむごいことが出来るものか、
統帥の外道だ」と 斥けている
- ▽部下思いの大西が 生還の道のない
必死の攻撃法に なぜ 部下を投じる決意を
- ▽10月17日 マニラに着任した大西を
驚かせたのが 零戦30機しか なかったこと
- ▽19日夕 第201航空隊を訪ね 幹部を集めて
「栗田艦隊のレイテ突入を成功させないと、由々
しきことになる。敵空母の飛行甲板を一週間ぐ
らい使えないようにする必要がある。そのため
には零戦に二百五十^キ爆弾を積んで、体当たりす
るほかないと思うが、どんなものだろうか」
- ▽副長の玉井浅一中佐は とっさに「自発的にやる
のと、組織の命令でやるのとでは違う」
- ▽201空には 玉井が1年前
松山航空隊で育てた 飛行予科練習生(第9期)
23人が 配属になっていた
- ▽「自分が打ち明ければ、何人かは自分に命をくれる
かも知れない」練習生を集めると 全員が賛成
- ▽「この少年兵の命を託す指揮官は、帝国海軍の名誉
と伝統にかけても、海軍兵学校の出身者でなけれ
ばならない」玉井が 猪口力平大佐(1艦艦長)に
相談すると 同じ意見だった
- ▽指揮官には 海兵(70期)関行男大尉が選ばれた

比島沖海戦の決算

◇日本側＝武蔵、山城、扶桑の戦艦3隻、空母瑞鶴など4隻、重巡6隻、軽巡4隻、駆逐艦11隻計28隻が沈没し、他に多くの艦艇が損傷を受けた。

◇米軍側＝小型空母1隻、護衛空母2隻、駆逐艦3隻の6隻が沈没しただけ。

連合艦隊はこれ以後、組織的な戦力を失う。日本本土-南方資源地帯を結ぶ補給線が断たれ、日本の敗北を決定づけることになる。

大西 滝治郎(おんし・たきろう)

明治24(1891)～昭和20(1945)兵庫県生



まれ。海軍中将。昭和18年11月軍需省新設と共に航空兵器総局総務局長。19年10月、第1航空艦隊長官に就任し、特攻作戦を採用。20年5月軍令部次長。敗戦翌日に自決

54歳の生涯は海軍航空隊の歴史

大西は中尉の時、日本最初の水上機母艦若宮のパイロットとなり、霞が浦航空隊副長、佐世保航空隊飛行長、空母赤城艦長を経て支那事変では第1連合航空隊司令官。

山本五十六の信頼も篤く、山本が開戦劈頭ハワイ真珠湾攻撃を決意した時も、真っ先に大西に相談、作戦計画を立てるよう依頼している。大西は、この奇襲攻撃に「無謀だ」と最後まで反対したほど、慎重さ、合理性を大切ににした。熱血漢で、西郷隆盛に似た風貌から、「大西郷に科学をプラスしたような男」と云われた。

…… 関大尉は23歳、新婚早々だった ……
玉井が「攻撃隊の指揮官として貴様に白羽の矢を立てたんだが、どうか」と云うと、関はオールバックにした

●大西は20日午前1時過ぎ、「神風特別攻撃隊」の編成命令を出した

▽選ばれた隊員24人は 本居宣長の

「しきしまのやまと心を 人とはゞ

朝日ににほふ 山さくら花」の歌から

敷島隊 大和隊 朝日隊 山桜隊の 4隊に

大西は全員を集めて訓示した

「いま日本を救うのは、重臣でも大臣でもなければ、軍令部総長でも司令長官でもない。それは諸子のごとき、純真にして、気力に満ちた若い人々のみである。従って自分は、一億国民に代わってお願いする。どうか成功を祈る」。

足がブルブル震えていたと云う。大西は副官に云っていた。「人の評価は棺を覆いてのち定まるという言葉があるが、多分俺の場合は、棺を覆いて定まらず、なお百年のちにも知己を得ないだろう」と。

▽特攻隊は 21日から出撃し

悪天候で ほとんどが 引き返した中で

セブ島基地発進の 大和隊・久納好孚中尉だけが

帰らなかった これが 特攻第1号

●関大尉ら敷島隊5機の空母群攻撃は25日

▽全機 低空で突っ込み

護衛空母1隻を撃沈 3隻を大破させた

▽昭和天皇は これを聞かれて「そのようにまでせねばならなかったか。しかし、よくやった」

▽連合艦隊長官の感状は 28日

「忠烈万世に燦たり」と 全軍に 布告された

▽朝日新聞は「噫忠烈」の見出しで

「身を捨てて国を救う 崇高極致の戦法

中外に比類なき 攻撃隊」

▽関大尉らは 11月12日 二階級特進

新聞紙面には 特攻隊員を「神鷲」

その戦死には「悠久の大義に殉ず」の言葉が

●日本の航空作戦は、全面的に特攻戦術に転換

▽敷島隊の成功に 大編隊攻撃法を主張していた

第2航艦長官 福留繁中将も 特攻を決意

長髪の手を両手で支え、目をつぶったまま身動きもしなかったが、やがて明瞭な口調で「是非、私にやらせて下さい」と云った。

大抵の本がこう書いているが、関係者に会って話を聞いている戦史研究者森史朗さんによると「一晩、考えさせて下さい」が、関の最初の反応だった。玉井から「明日にも攻撃隊を発進させねばならぬ。時間の猶予はない」と云われ、無造作に一言「わかりました」と答えたと云う。

関は愛媛県西条市出身。母サカエは夫の死後、草餅の行商をしながら関を育てた。関は新婚3か月だったが、親しい報道班員に、「わしは天皇陛下の御為とか、国の為とかで行くんじゃない。最愛のKAの為に行くんだ。もし日本が負ければKAがアメリカ兵にやられる。それをさせない為に行くんだ」と云っている。

KAは、「かかあ」の頭文字からとった海軍士官の隠語だが、関は新妻満里子に遺書を残している。「何もしてやる事も出来ず散り行く事はお前に対して誠に済まぬと思って居る。何も云わずとも、武人の妻としての覚悟は十分出来て居る事と思ふ。御両親に孝養を専一と心掛け生活して行く様、色々思出をたどりながら出発前に記す」。

いきなり「国のために死んでくれ」と云われて、私には、森さんの書いた関大尉が本当のように思える。

このレイテ戦で、特攻隊員として戦死した第13期飛行予備学生の遺稿集「雲流るる果て」には「生きるのは良いものと気が付く 三日前」「体当りさぞ痛かろうと 友は征き」とある。

▽第4航空軍も11月12日 万朶隊を皮切りに
▽20年1月までに 海軍が106回 約440機
陸軍は62回 約400機の特攻隊が出撃
「1億総特攻」の気運を 生んでいく

- 大西が自決したのは終戦翌日、16日午前2時過ぎ
▽軍令部次長官舎で 腹を十文字に切り
軍医が手当てしようとする と 手を振って拒み
「これでいいんだ。送り出した部下たちとの約束
が果たせる」「俺も必ず後から行く」と
言い続けていた大西は 流血の中で絶命した

大西の遺書

「特攻隊の英霊に曰す」で始まり「善く戦ひたり、深謝す。最後の勝利を信じつゝ肉弾として散華せり。然れ共其の信念は遂に達成し得ざるに至れり。吾死を以て旧部下の英霊と其の遺族に謝せんとす」。

「次に一般青壮年に告ぐ」として「我が死にして、軽挙は利敵行為なるを思ひ、聖旨に副ひ奉り、自重忍苦するの誠(まじめ)とならば幸なり。隠忍するとも日本人たるの矜持を失ふ勿れ。諸子は国の宝なり。平時に処し、猶ほ克く特攻精神を堅持し、日本民族の福祉と世界人類平和の為、最善を尽くせよ」。

辞世は「之でよし 百万年の 仮寝かな」。

- 日本軍のレイテ増援作戦は悲惨を極めた
▽第26師団は 米機300機の空襲を受け
輸送船4隻が沈没 兵員1万は上陸したものの
重火器 食糧 弾薬は 全て水没 裸同然の上陸に
▽敗残兵が彷徨い 夜になると 食糧泥棒が横行

梅津参謀総長は上奏した(11月14日)

第二十六師団は食糧皆無、第一師団は二十一日分の食糧を携行してレイテに至り、今や十四日であるから残りは七日分のみ。第二十六師団は機関銃をも携行出来ずに上陸し、従って食糧の如きは全く揚陸してなく、背囊内の携行食糧もすでに尽きようとしている。

「人間兵器」が作られていった

「もはや特攻しかない」の空気は、マリアナ沖海戦に大敗しサイパンが陥落した時、すでに出来ていた。海軍が人間魚雷「回天」を制式兵器として採用したのが19年8月1日。

九三式魚雷を一人で操作し、1550*_gの爆弾ごと敵艦に体当たりさせる。「必死必中」の精神を兵器にしたもので、天下の形勢を一変させるという意味から「回天」と命名され、9月13日には海軍省に海軍特攻部が設置された。

ベニヤ製モーターボートに、爆弾をつけて体当たりする「震洋」、海に潜って爆弾をつけた棒の先で敵艦を突き上げる「伏竜」、飛行機に吊して目標近くで切り離す人間ロケット「桜花」と、特攻兵器が作られていった。

風船爆弾

陸軍は11月3日、千葉県一宮など太平洋岸42か所から、米本土に向け「風船爆弾」の第1回発射を行なった。「ふ号作戦」と呼ばれたが、和紙を貼り合わせた直径10_{cm}、重量80*_gほどの気球に爆弾、焼夷弾を吊り下げ、偏西風に乗せて米本土を爆撃しようというもの。女子挺身隊、女子学生を動員して作られ、20年春までに約9千個飛ばしたと云う。

風任せ、行き先は風に聞いてくれというようなものだが、20年元日付米週刊誌タイムは「12月初め、日本から飛来した風船爆弾がモンタナ州に落ち、樵が発見した」と報じている。

マッカーサーは勝利宣言

レイテ決戦のころ「いざこいニミツツ、マッカーサー。出てくりや地獄へ逆落とし」の歌が流行った。

しかしマッカーサーは、レイテ上陸

- 小磯首相は11月8日、「レイテ戦こそ天王山」
 - ▽山下方面軍司令官は翌日の9日には
「レイテ決戦中止」の意見具申をする
 - ▽陸軍大将とはいえ 予備役の悲しさ
そんな 悲観的な戦況は 全く 知らない
 - ▽8日の最高会議で「敵撃滅のためには、今日国力
を云々する時ではない。この際思い切った戦争
指導をしてもらいたい」と 統帥部にハッパ
 - ▽レイテは 天王山どころか 天目山だった
 - ▽陸軍が 自前の潜水艇で 食糧を輸送したり
11月26日夜には 蒸空挺隊80人が
ブラウエン飛行場に 輸送機4機を
胴体着陸させて 斬り込みを敢行
 - ▽大勢に 影響を与えるようなものでは なかった
- 大本营は12月19日、「レイテ決戦放棄」を決定
 - ▽山下は25日 第35軍に「自活自戦しろ」
兵隊も 食糧 弾薬も 送らない 「縁切り命令」
 - ▽レイテに投入された兵力は 7万5千
そのうち レイテから脱出した者 900名
終戦までに捕虜になった者 800名
終戦後まで生き残った者 700名
- 梅津参謀総長は27日、「決戦中止」を天皇に報告
 - ▽小磯首相が知ったのは 30日になってから
 - ▽参内すると 居合わせた杉山陸相が「統帥部は
レイテ決戦を止めて、ルソン決戦に変更したぞ」
 - ▽天皇からも「知っているか」と聞かれ
「天王山の後始末」を 尋ねられた
 - ▽梅津を責めても「比島全体が初めから決戦場」
 - ▽小磯も仕方なく 元日夜 年頭のラジオ放送で
「フィリピン全域が天王山」と 言い換え
- 戦争指導の混迷が続く中、米軍は20年1月9日、ルソン島リングエン湾に20万の大軍を上陸
 - ▽天皇は「重臣たちの意向を聞きたい」(1月6日)
 - ▽2月7日から 開戦以来 初の重臣上奏が
「寒中ご機嫌伺い」の名目で 行なわれる

作戦が始まった10月20日午後2時、巡洋艦ナッシュピルの艦上からゲリラの通信波長を使って放送した。「私はマッカーサー大将である。フィリピン市民諸君、私は帰ってきた。全能の神の加護により、わが軍は米比両国民の血で聖められたフィリピンの土の上に、再び立っている」。

日本軍に追われてフィリピンを去る時にした約束、「アイ・シャル・リターン」を果たした。

..... 天王山と天目山

天王山=京都府南部山崎町にある海拔270mの山。1582年の山崎の戦いで先に占領した豊臣秀吉軍が明智光秀軍を撃破したことから、「勝負の分岐点」に使われる。

天目山=山梨県東山梨郡大和村にある海拔1380mの山。1582年、織田軍に攻められた武田勝頼が一族と共に山麓で自刃したことから「土壇場」の意味に使われる。

— 第14方面軍命令(19. 12. 25) —

尚集団長(第35軍司令部)は、その作戦地域内に於て自活自戦、永久に抗戦を継続し、国軍将来における反攻の支攢(しとう=支え)たるべし。

— 大本营機密日誌(19. 12. 19) —

こうなった以上、今後の戦争指導上 和戦の転機を何れに指向すべきか、は重大な問題となって来た。ここに本土決戦思想が擡頭するに至った。

「レイテ決戦と小磯内閣」関係年表

年	日	出来事	年	日	出来事
11	1936	2. 26 二・二六事件。内大臣斎藤實ら殺害	19	1944	10. 20 米軍20万、レイテ島上陸◆大本営、「地上決戦はルソン」の方針を「レイテ決戦」に変更◆第1機動艦隊(小沢治三郎中将)、ルソン海峡目ざし豊後水道出撃◆大西滝治郎中将(第1艦隊)「神風特別攻撃隊」の編成命令◆日比谷公会堂で「1億憤怒米英撃摧国民大会」◆マッカーサー「私は帰ってきた」と放送
12	1937	7. 7 蘆溝橋事件勃発。支那事変始まる			10. 21 神風特攻隊・大和隊発進。悪天候で久納好孚中尉機未帰還。特攻初の死者
14	1939	11. 20 大本営と大本営政府連絡会議設置			10. 22 栗田艦隊、ブルネイ出撃◆福留繁中将の第2航空艦隊(395機)比島進出
15	1940	9. 1 第2次世界大戦始まる			10. 23 比島沖海戦(26日)◆栗田艦隊旗艦愛宕撃沈され、司令部は戦艦大和移乗
16	1940	9. 27 日独伊三国同盟、ベルリンで調印			10. 24 基地航空部隊、250機の航空総攻撃失敗◆戦艦武蔵、シブヤン海で沈没
	1941	4. 13 日ソ中立条約、モスクワで調印			10. 25 神風特攻隊・敷島隊の関行男大尉ら5機、護衛空母1隻撃沈、3隻大破 ◆スリガオ海峡で西村祥治中将の艦隊は戦艦山城、扶桑沈没◆後続の志摩清英中将の艦隊も戦場離脱◆小沢艦隊、空母4隻を失うも敵機動部隊牽制に成功◆栗田艦隊はサマル島沖で砲戦により護衛空母1、駆逐艦3隻撃沈。レイテ湾を目前に敵機動部隊の情報で反転
	1941	6. 22 ドイツ軍、ソ連に侵攻。独ソ戦始まる			10. 27 第1、第26師団にレイテ派遣命令◆第2航空艦隊も全面特攻作戦に踏み切る
	1941	10. 18 東条英機内閣発足。東条は陸相兼任			10. 28 関大尉ら5人に連合艦隊長官感状
17	1942	12. 8 太平洋戦争始まる。真珠湾攻撃			11. 1 マリアナ発進のB29、東京を偵察
	1942	6. 5 ミッドウェー海戦。主力空母4隻喪失			11. 3 米本土に風船爆弾攻撃(ふしづか)開始
	1942	8. 7 米軍、ガダルカナルに上陸開始			11. 7 スターリン、革命記念日に日本を「侵略国」と非難演説
18	1943	1. 14 米英首脳がカサブランカ会議。「日独伊三国の無条件降伏の原則」を決定			11. 8 小磯首相、「レイテ戦こそ天王山」
	1943	2. 1 ガダルカナル撤退開始(7日)			11. 9 山下、南方軍にレイテ戦中止を具申
	1943	9. 8 イタリア無条件降伏			11. 10 汪兆銘南京政府主席、名古屋で病死
19	1944	11. 28 米英ソ三首脳、テヘラン会談			11. 11 南方軍、レイテ決戦続行を命令
	1944	2. 21 東条首相、陸相兼任のまま参謀総長			11. 12 海軍、関大尉ら5人の2階級特進発表◆陸軍特攻隊・万葉隊、米艦船を攻撃
	1944	6. 6 連合軍、仏ノルマンディ上陸			11. 24 B29、三鷹の中島飛行機工場を爆撃
	1944	6. 15 米軍、サイパン島に上陸開始			11. 26 陸軍航空挺隊80人、輸送機4機でブラウエン飛行場に胴体着陸し斬り込み
	1944	6. 19 マリアナ沖海戦。空母3隻を失う			12. 15 米軍、ルソン南のミンドロ島に上陸
	1944	7. 7 サイパン島守備隊玉砕			12. 19 大本営、「レイテ決戦放棄」を決定
	1944	7. 18 東条内閣総辞職 ◆参謀総長に梅津美治郎大将◆大本営、サイパン玉砕発表			12. 25 第35軍に「自活自戦」の永久抗戦命令
	1944	7. 20 小磯内閣(閣議)米内光政に組閣の大命◆ヒットラー総統暗殺未遂事件			12. 27 両総長、「レイテ決戦断念」を上奏
	1944	7. 22 小磯・米内協力内閣成立。米内は現役に復帰し海相、陸相には杉山元元帥◆東条の予備役編入発令される			12. 30 小磯首相「レイテ決戦中止」を知る
	1944	7. 24 両総長「捷号作戦計画」を上奏し裁可			1. 1 年頭放送で小磯「比島全域が天王山」
	1944	7. 28 比島の第14軍を第14方面軍に昇格し比島中南部担当の第35軍を新設			1. 6 米艦隊、リングエン湾に進入、艦砲射撃を開始◆天皇、木戸幸一内大臣に戦局観聴取のため重臣招致を希望
	1944	8. 1 海軍、人間魚雷「回天」を制式採用			1. 9 米軍、ルソン島リングエン湾に上陸
	1944	8. 4 閣議「国民総武装」のスローガン決定			2. 7 天皇、重臣を招致し意見聴取(26日)
	1944	8. 5 大本営政府連絡会議を廃止し最高戦争指導会議設置◆井上成美、海軍次官			3. 9 298機のB29、東京大空襲。江東全滅
	1944	8. 10 第1航空艦隊改編。ダバオに司令部			4. 1 米軍、沖縄本島に上陸
	1944	8. 19 最高会議、御前会議で「今後採るべき戦争指導大綱」、「世界情勢判断」決定			4. 5 小磯内閣総辞職、鈴木貫太郎に大命◆ソ連、日ソ中立条約不延長を通告
	1944	8. 28 重光葵外相、スターマー独大使に「独ソ和平」斡旋を提議(9月14日閣議)			5. 7 ドイツ、連合軍に無条件降伏
	1944	9. 4 ソ連特使に広田弘毅(元首相)派遣決定			7. 26 連合軍、ポツダム宣言発表
	1944	9. 9 米機動部隊、ダバオなどを空襲			8. 6 米軍、広島に原爆投下(9日長崎)
	1944	9. 10 ダバオ海軍見張所、「敵上陸」の誤報			8. 9 ソ連軍、満州、朝鮮、樺太で侵攻開始
	1944	9. 13 海軍省に「海軍特攻部」設置			8. 15 敗戦
	1944	9. 15 米、レイテ上陸を10月20日と決定			
	1944	9. 18 ソ連、日本の特使派遣を拒否			
	1944	9. 21 米機動部隊、マニラ空襲 ◆両総長、決戦方面を「捷1号(比島)」と上奏	20	1945	1. 1 年頭放送で小磯「比島全域が天王山」
	1944	9. 25 連合艦隊、「T攻撃部隊」を編成			1. 6 米艦隊、リングエン湾に進入、艦砲射撃を開始◆天皇、木戸幸一内大臣に戦局観聴取のため重臣招致を希望
	1944	9. 26 第14方面軍司令官に山下奉文大将			1. 9 米軍、ルソン島リングエン湾に上陸
	1944	9. 29 連合艦隊司令部、慶大日吉分校移転			2. 7 天皇、重臣を招致し意見聴取(26日)
	1944	10. 10 米機動部隊の沖縄、台湾空襲始まる			3. 9 298機のB29、東京大空襲。江東全滅
	1944	10. 12 台湾沖航空戦。T攻撃部隊出撃			4. 1 米軍、沖縄本島に上陸
	1944	10. 16 大本営「台湾沖航空戦で殲滅的打撃」と大戦果発表◆日本軍索敵機、台湾沖に米機動部隊を発見、戦果に疑問…			4. 5 小磯内閣総辞職、鈴木貫太郎に大命◆ソ連、日ソ中立条約不延長を通告
	1944	10. 17 米軍、レイテ湾口スルアン島上陸			5. 7 ドイツ、連合軍に無条件降伏
	1944	10. 18 大本営「捷1号作戦」発動◆栗田健男中将の第2艦隊リング泊地を出撃			7. 26 連合軍、ポツダム宣言発表
	1944	10. 19 大本営「台湾沖航空戦で撃沈破45隻」と発表(実際は巡洋艦2隻大破)			8. 6 米軍、広島に原爆投下(9日長崎)